



Iwaki Taira Castle
HISTORY WALK MAP

磐城平城

歴史散策 MAP



「龍ヶ城」とも呼ばれた「磐城平城」。

築城から農民一揆、そして、

落城までの激動の歴史を

三枚の絵図とともに巡ります。

絵図 1

磐城平城 3大事件と3枚の絵図

人柱事件—鳥居忠政による城づくりと「正保平城絵図控」

〔磐城平城の築城〕

戦国時代に、いわき地域などを支配したのは戦国武将の岩城家でした。しかし、岩城家は慶長5(1600)年、徳川家康が行った会津の上杉景勝討伐の際にも、また、関ヶ原の戦いの際にも、家康に味方をしませんでした。そのため、慶長7(1602)年、岩城家は12万石の所領、全てを没収されてしまいました。

岩城家に代わって、鳥居忠政が初代の磐城平藩主になって、この地を治め、磐城平城を築きました。磐城平城は領内支配のための拠点として築かれたわけですが、それ以外にも大切な役目がありました。仙台の伊達政宗をはじめとする東北地方の武将たちの動きを押さえ、江戸を守るというものでした。

磐城平城に天守はありませんでしたが、その代わりに、本丸に三階櫓と八ツ棟櫓が築られました。三階櫓は3層3階建て、高さは約13メートル、広さは東西が約14.5m、南北が約9mで、本丸の南端、城下町を見下ろす場所に建てられました。また、八ツ棟櫓は2層2階建てで、高さは約10m、本丸の南東隅に建てられました。また、本丸には本丸御殿という平家建ての大きな建物も建てられました。

城には本丸を中心に、二ノ丸、三ノ丸が配置され、また、大手内曲輪、大手外曲輪、焰硝曲輪、水之手曲輪、杉平曲輪、六間門

曲輪、田町曲輪なども設けられました。曲輪のうち、田町曲輪は本丸などがあつた山の上ではなく、山の麓に設けられ、そのため、磐城平城は平山城に分類されます。

また、城には中門、大手門、搦手門、六間門、櫛形門、埋門、中仕切門などの城門が設けられ、重要な門には門と一体になった櫓も築られました。そして、大手門や黒門、六間門、搦手門などは枡形虎口になっていました。また、城のまわりには内堀や外堀などの堀が2重、3重に巡らされました。

また、磐城平城は城の部分だけではなく、城下町も含めて、河川や人工の水路によって守られていました。

磐城平城を築く際、鳥居忠政は人柱を立てました。本丸の北西部から流れ出る後沢という沢の出口のところにと土手を築いて、沢を流れ下る川を堰き止め、そこを城の内堀の一部にしようとした。しかし、工事がうまくいかず、3度も失敗し、終には丹後という老人を人柱に立て、工事を完成させました。

〔高久騒動〕

磐城平城を築いた鳥居忠政は元和8(1622)年、山形に国替えになりました。この時、高久騒動という農民騒動が起きました。



磐城平城の築城の際、人柱に立った丹後の願いによって、丹後の孫、弥蔵が山目付に取り立てられましたが、弥蔵は権力を振りかざしたり、賄賂を取ったり、小さな罪でも大袈裟に取り上げたりして、多くの農民を潰しました。

このため、農民たちは忠政の山形への国替えの際、弥蔵の身柄をもらい受け、焼き殺したいと訴え出ました。しかし、藩はこれを認めません。農民たちの怒りはエスカレートし、明日、弥蔵の屋敷を襲い、弥蔵を焼き殺そうと決めました。

一方、藩の家老、高須弥助は菅波村の弥蔵に密かに使者を送り、「すぐに逃げろ」と伝えました。弥蔵は驚きましたが、家の者たちを連れ、その夜のうちに姿をくらしました。

翌日、農民たちが弥蔵の屋敷に行ってみると、蛻の殻。これではどうしようもないと引き揚げようとしたが、高久村の農民が「我が村の隼人は弥蔵の仲間、多くの農民を苦しめ、潰した。かなうのであれば、隼人を焼き殺したい」と訴え、これに農民たちが応じ、隼人の屋敷を襲い、家の者18人を焼き殺しました。

ところが、この時、隼人の娘が一人、家を抜け出し、家老の弥助に急を知らせました。弥助は家来を率いて、現場に駆けつけ、罪の有るなしに関係なく、その場に居合わせた者たち48人を次々に捕まえ、死罪に処しました。

〔磐城平藩の歴代藩主〕

磐城平藩の初代藩主、鳥居忠政は元和8(1622)年、山形に国替えになり、それに代わり、内藤政長が新たな藩主になりました。内藤家は政長、忠興、義概、義孝、義稠、政樹と6代にわたって藩主を務めました。しかし、延享4(1747)年、内藤家は九州の延岡に国替えになり、次に井上正経が新しい藩主になりましたが、程なく、国替えになり、代わりに、安藤信成が磐城平藩主になりました。安藤家は信成、信馨、信義、信由、信正、信民、信勇の7代にわたって藩主を務めました。

〔正保平城絵図控〕

江戸時代初めの正保(1644~1648年)の頃に描かれたと考えられる絵図です。絵図の中央には磐城平城が描かれ、その周囲には夏井川や新川、好間川に囲まれた城下のまちなぎの様子が描かれています。磐城平城が築かれて間もない頃の様子が描かれた貴重な絵図です。本丸の北側には、人柱が立てられたとされる丹後沢が内堀の一部として、しっかりと描かれています。

※磐城平城歴史散策マップは、いわき地域学会の協力のもと製作しています。

一般社団法人
いわき観光まちづくりビューロー
〒972-8321
福島県いわき市常磐湯本町向田3-1
(いわき市石炭・化石館ほる内)
TEL.0246-44-6545

いわき市総合観光案内所
〒970-8026
福島県いわき市平田町38-16
JRいわき駅コンコース自由通路
TEL.0246-23-0122
受付時間 / 10:00~18:00

f @iwaki.kankou
@iwakikankou
iwaki_kankou

いわき平城歴史散策マップ
https://kankou-iwaki.or.jp/



〔元文一揆〕

元文3(1738)年9月、磐城平藩で大規模な農民一揆が起きました。藩が増税や新たな税金を導入しようとしたことが一揆の直接的な引き金になりました。

この一揆のことについては大須賀筠軒が『磐城史料』に詳しい記述を残しています。

まず、一揆の始まりですが、筠軒は「檄文一通ヲ伝へ、封内ヲ周廻セリ」と書いています。この檄文によって、総勢2万人余の農民が決起し、9月18日には旗を翻し、火螺貝を吹き鳴らして氣勢をあげ、城下に乱入しました。農民たちは役所を襲い、牢屋に入っていた荒田目村の喜惣次を牢屋から出したり、藩士の屋敷や商人宅を次々に襲ったりしました。その夜、農民たちは城下にとどまり、翌日の9月19日には城を包囲しました。

9月20日、城の大手門が開き、塚本雲平、赤井喜兵衛、本間吉兵衛、原兵左衛門の4人の藩士が100人ほどの手勢を率いて姿を現わし、「お前たちの話を聞くのではないか」と声をかけ

ると、10人ほどの農民が進み出て、「我々は貧困のどん底にいる。我々の要求を書いた願い書を藩主に、直接、見てもらいたい」と訴えました。すると、塚本は「承知した。お前たちは村に帰り、返事を待て」と答え、翌日の9月21日、農民たちから願い書を預かり、それを藩主、内藤政樹に見せるため、藩士2人が江戸に向かいました。

願い書を見た藩主、内藤政樹は農民たちの願いを受け入れ、増税と新税の実施を中止しました。しかし、国元の家老たちは一揆の首謀者たちを罰することなく、農民たちの願いを一方的に聞き入れるわけにはいかないと、「藩主からの返事を伝えるので出頭せよ」と一揆の首謀者5人を役所に呼び出すと、その場で捕まえ、そのまま牢屋に入れてしまいました。また、それ以外にも、数名の農民を次々に捕まえ、牢屋に入れました。

翌年の元文4(1739)年8月23日、夏井川の鎌田河原と二町目の牢屋で一揆の首謀者たちが打ち首に処せられました。

延享4(1747)年、藩主、政樹は延岡に国替えになりました。



「磐城平古地図」

江戸時代中期の元文2(1737)年から延享4(1747)年頃に描かれたと考えられる地図です。磐城平城と城下の様子が描かれ、城や侍屋敷は黄色、町屋は薄い桜色、堀や河川は青色、緑地や斜面は緑色、道は赤色で着色されていて、当時の土地利用の状況がひと目でわかります。この地図が描かれた時期は、磐城平藩で大規模な農民一揆、元文一揆が起きた時期と重なります。一揆に立ち上がった大勢の農民たちが、領内全ての村々から磐城平城下に押し寄せ、城を取り囲みました。その様子を、この絵図のうえに重ね合わせ、この絵図を改めて見てみると、絵図は突如として、多くのメッセージを発信してくれそうです。

〔戊辰戦争のはじまり〕

慶応4(明治元、1868)年の夏、磐城平の地は戊辰戦争の戦場になりました。

慶応4年1月、戊辰戦争は京都で始まり、その後、戦いの場は関東地方にも移り、3月6日には山梨県の勝沼、4月19、20日には栃木県の宇都宮、翌月の閏4月3日には千葉県市の市川や船

橋、そして、5月15日には東京都の上野で戦いがありました。この後、戦いの場は北へと移り、東北地方の太平洋側でも戦いが起きました。

〔いわきの地での戊辰戦争〕

慶応4年6月16日、新政府軍の薩摩藩や佐土原藩、大村藩の部隊が茨城県北茨城市の平潟に上陸したところから、磐城平藩の実質的な戊辰の戦いが始まりました。翌日の6月17日、新政府軍の部隊を平潟から追い出そうと、奥羽越列藩同盟軍の磐城平藩や仙台藩、泉藩、湯長谷藩、相馬藩などと旧江戸幕府の勢力が兵を繰り出し、いわき市勿来町の九面のあたりで戦いが起きましたが、この戦いでは新政府軍が勝利しました。

その後、柳川藩や岡山藩などの援軍を加えた新政府軍は北に向け、進撃し、6月28日には泉藩の居城、泉城を落とし、6月29日には湯長谷藩の居城、湯長谷城を落としました。また、6月29日には小名浜の二ツ橋、そして、中之作でも戦いがありましたが、いずれの戦いでも新政府軍が勝利しました。

〔磐城平城の落城〕

次に、新政府軍の攻撃の矛先は奥羽越列藩同盟軍の拠点が置かれた磐城平城に向けられました。磐城平では6月29日と7月1日、7月13日の3回、戦いが行われました。

6月29日の第1次磐城平の戦いでは、新政府軍の佐土原藩と岡山藩の部隊が磐城平城下の南西、新川に架かる長橋の南側まで攻め寄せ、橋を挟んで戦いが起きました。戦いは午後4時頃に始まりましたが、日没を迎え、新政府軍が兵を引き、この

日の戦いは引き分けに終わりました。

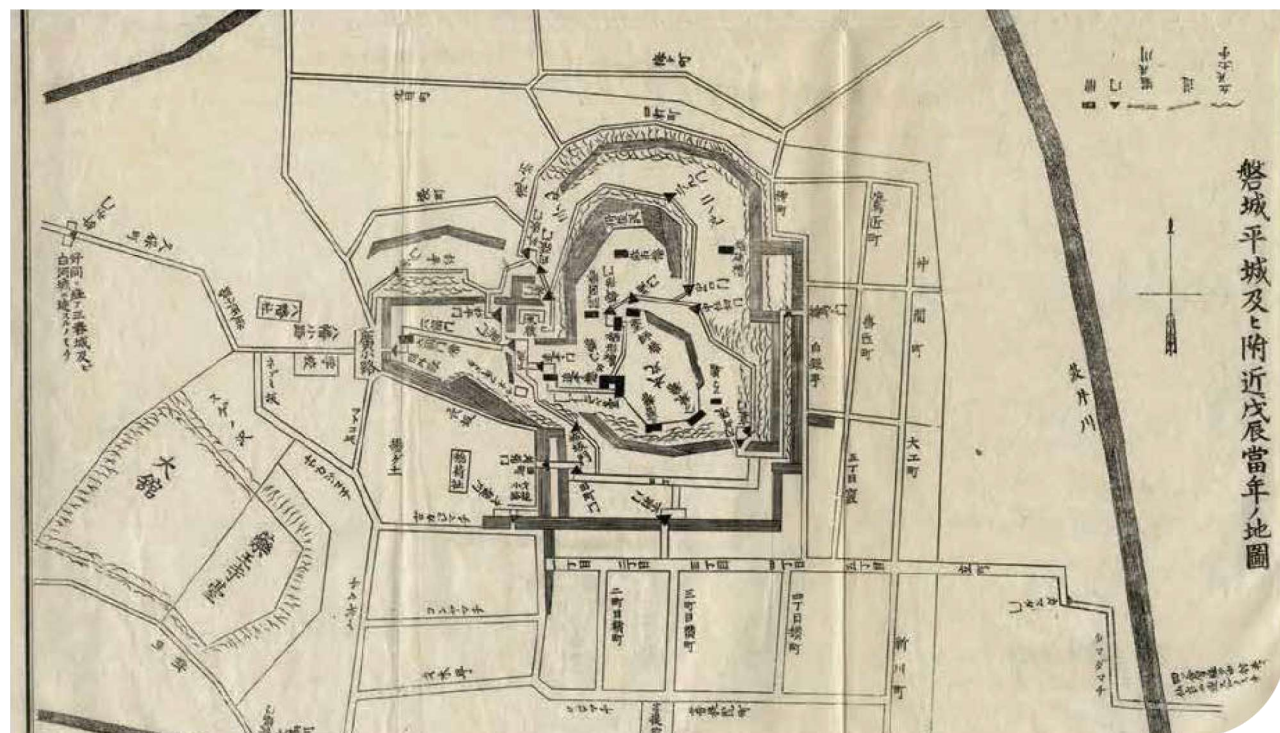
翌日の7月1日、第2次磐城平の戦いでは、新政府軍の薩摩藩や大村藩の部隊が磐城平城下の南、谷川瀬に攻め寄せ、戦いが起きましたが、磐城平に応援に来た米沢藩の部隊の活躍などもあって、奥羽越列藩同盟軍が勝利しました。磐城平藩の藩士、桑原重左衛門は、それを「此日、諸手、大勝利にて、敵兵、蜘蛛の子を散す如く、軍事山をさして退き、荒川村迄追打」(『進退并見聞書』)と書いています。

7月13日の第3次磐城平の戦いで、磐城平城は新政府軍による猛攻を受けました。朝早く、薩摩藩や佐土原藩、大村藩、柳川藩、岡山藩など、新政府軍の大軍が城下に攻め寄せました。新川町や鎌田町、長橋町などから城下に攻め入った新政府軍の部隊は、不明門を破って城の搦手に迫り、また、才槌門や田町門を破って六間門に攻め寄せました。そして、16時間に及ぶ激闘の末、磐城平城は真夜中の12時頃、落城しました。

落城から約2か月後の9月24日、磐城平藩は安藤信正の名で、新政府軍に謝罪降伏状を提出しました。

その後の明治元(1868)年12月7日、磐城平藩の藩主、安藤信勇に謹慎と陸中磐井3万4千石への国替えが命じられましたが、信勇は磐城平への復帰を新政府に働きかけ、明治2(1869)年8月3日、7万両の献金と引き換えに磐城平への復帰が認められました。しかし、同年8月19日、版籍奉還が行われ、藩の版(土地)と籍(人民)は朝廷の帰属となり、藩主は知藩事に任命されました。

さらに、明治4(1871)年7月の廃藩置県によって、磐城平藩は消滅し、信勇も知藩事の職を解かれました。

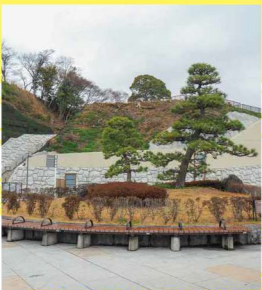


「磐城平城及ヒ附近戊辰当年ノ地図」

戊辰戦争があった慶応4(1868)年当時の磐城平城や城下の様子が描かれた地図です。城内の曲輪、建物、門の名称や地名、さらには、城下の町名や地名、通りの名称などがたくさん書かれています。戊辰戦争の際には6月29日、7月1日、7月13日の3度、磐城平の地で激しい戦いがありましたが、その時の戦いの様子などを書き記した文字による記録類を、この地図を見ながら読み進めると、極めてリアルな情景が浮かび上がってきます。

1 いわき駅北口交通広場

いわき市の木、クロマツが迎える広場。江戸時代、このあたりには磐城平城の搦手門がありました。この広場には、城の歴史や城下町地図のパネルが設置されています。



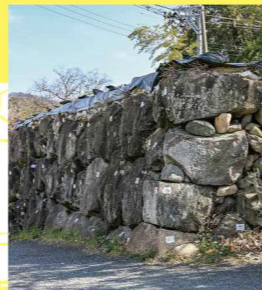
2 白蛇堀（磐城平城しろあと公園）

水之手曲輪にある堀です。白い蛇が棲んでいたという話が伝えられています。白蛇堀には清らかな湧き水が出ています。かつては、その湧き水で茶を淹れたともいわれています。



3 磐城平城塗師櫓石垣

塗師櫓は磐城平城の本丸への北側の入口に設けられた櫓です。石垣の一部が今も残っており、市の指定史跡になっています。戦国末期～江戸初期の石積みの特徴を伝えています。



4 磐城平城中門櫓石垣

磐城平城の本丸の西、大手側に中門がありました。中門の石垣の一部が残っています。石垣の一部は東日本大震災で崩れ、内部の石積みの様子を見ることが出来ます。



5 丹後沢公園

本丸、二ノ丸、三ノ丸に囲まれた丹後沢は磐城平城の内堀の一部でした。築城の際、沢を堰き止める土手工事で丹後という人物が人柱になりました。



6 鳥居家墓所（長源寺内）

磐城平藩初代藩主・鳥居忠政の父、鳥居元忠の墓があります。元忠は伏見城の戦いで城に籠って奮戦、討死をしました。後に「三河武士の鑑」と称えられました。



7 飯野八幡宮

康平6(1063)年、源頼義が京都の石清水八幡宮を勧請したのが始まりとされています。建永元(1247)年、北条時頼が伊賀光宗を預所とし、光宗は飯野八幡宮の神職を兼務しました。



磐城平藩歴史年表

- 1600(慶長5)年 関ヶ原の戦い
- 1602(慶長7)年 鳥居忠政、下総国矢作藩万国から磐城平藩10万石に国替え、磐城平藩主になる。後に所領12万石となる。
- 1603(慶長8)年 徳川家康が征夷大将軍となり、江戸幕府を開く。
- 1622(元和8)年 鳥居忠政、磐城平藩12万石から山形藩20万石に国替えになる。内藤政長が上総国佐貫藩7万石から磐城平藩に7万石で国替えになる。政長の子、内藤忠興は政長の所領7万石とは別に所領2万石を持つ。政長の後、忠興、義概、義孝、義嗣、政樹と内藤家が6代にわたって、磐城平藩主を務めた。
- 1634(寛永11)年 磐城平藩領を分け、内藤政晴が泉藩2万石を立藩。
- 1670(寛文10)年 磐城平藩からの新田立藩として、遠山政光が湯長谷藩1万5千石を立藩。
- 1679(延宝7)年 浅香竹右衛門騒動、起きる。
- 1680(延宝8)年 小姓騒動、起きる。
- 1738(元文3)年 9月 元文一揆、勃発。
- 1747(延享4)年 内藤政樹、延岡藩7万石に国替え。井上正経、常陸国笠間藩から磐城平藩に6万石で国替えになる。
- 1756(宝暦6)年 井上正経、大坂城代となり、大坂に移る。安藤信成、美濃国加納藩5万石から磐城平藩に5万石で国替えになる。信成以後、信誓、信義、信由、信正、信民、信勇と、安藤家は7代にわたって、磐城平藩主を務めた。
- 1862(文久2)年 1月 坂下門外の変。磐城平藩主で江戸幕府の老中であった安藤信正が江戸城の坂下門外で水戸藩浪士らに襲われる。
- 1868(慶応4・明治元)年 6月 新政府軍、平潟(ひらかた)に上陸する。泉城、落城。湯長谷城、落城。
6月29日 戊辰戦争、第1次磐城平の戦い。
7月1日 戊辰戦争、第2次磐城平の戦い。
7月13日 戊辰戦争、第3次磐城平の戦い、磐城平城、落城。



8 良善寺・戊辰戦死者追福改葬浄地

江戸時代の中頃から幕末にかけ、磐城平藩の藩主を務めた安藤家の菩提寺です。墓所は本堂の西側にあり、その北側には戊辰戦死者追福改葬浄地があります。



磐城平城しろあと公園

(令和8年4月11日開園)



磐城平城の歴史や城下町として発展してきた磐城平の文化に触れることができる特色ある公園です。まちの成り立ちを振り返り、新たにいわきを知るきっかけとなる「歴史・文化の拠点」、四季を彩る緑豊かなランドマークとなる「緑の拠点」、憩いと安らぎを得ることのできる「地域のコミュニティ拠点」としての3つの機能をもっています。

9 安藤信正公像(松ヶ岡公園)

磐城平藩主・安藤信正の銅像です。幕末、江戸幕府の老中として開国や公武合体策などを推し進めました。銅像は大正11(1922)年に建立、昭和36(1961)年に再建されました。



磐城平城しろあと公園体験学習施設

緑天庵(ろくてんあん)



地域の歴史を伝承する場、日本の伝統文化を体験する場、市民や来訪者の交流の場としての機能をもっています。館内には、磐城平城の本丸御殿や三階櫓、八ツ棟櫓など、当時の磐城平城がコンピュータグラフィックスの動画映像により蘇り、いわきの歴史を感じることができる「展示交流室」やデジタルサイネージにより市内の文化財・観光情報を発信する「情報発信室」、茶道や華道、書道等の文化活動の体験ができる「文化体験室」があります。

いわきデジタルミュージアム



IWAKI DIGITAL MUSEUM

好奇心に、追い風を。

いわき市内に点在する文化施設の収蔵品や、指定文化財などの「いわき市の文化資源」を、いつでも・どこでも・誰でもインターネット上で手軽に閲覧することができるポータルサイトです。「正保平城絵図控」や「平城下古地図」などを解説コンテンツで詳しく見ることが出来ます。



MAP

「いわきの地での戊辰戦争」 —第1,2,3次磐城平の戦い—

第1次磐城平の戦い

慶応4(1868)年6月29日

A 長橋口での戦い
「平城長橋門二相迫り、激戦数回、賊ハ前面、竝、左方山手ノ砲台ヨリ、大砲、小銃無数乱射ニ及び候得共、勝敗相決セズ」(『岡山藩記』)

第2次磐城平の戦い

慶応4(1868)年7月1日

B 第2次磐城平の戦い
「敵兵には古川、新川土手を橋に取り、尤、大砲式艇、其内 砲艇は山岸より打立、砲艇は新井田橋向に据置、御城中を目掛、頻に打出候得共、御城中へは一発も不届、皆、田町辺にて破裂致候」(磐城平藩『神谷外記書上げ』)

第3次磐城平の戦い

慶応4(1868)年7月13日

C 田町での戦い
「十一番隊、私領一番隊、同二番半隊は不明門を破り、搦手の内堀に攻入、散々、砲戦、剣戦いたし候得共、奥州第一の堅城とやらにて、内堀は深く、殊に城郭は高くして、急に乘入難し」(薩摩藩『私領二番隊戦状』)

D 才樋小路での戦い
「町口門と申一ノ城門、攻入難く候付、則、隊長、当先として、城屏を越へ、門をひらき、一同、推入。二ノ城門との間、銃丸、雨の如く、苦戦に及び、此時、隊長、手負、賊兵も余多討取、三ノ城門、打破、攻入候」(薩摩藩『本府小銃九番隊戦状』)

E 籠城しての戦い 大手内曲輪のあたり
「官軍、不明御門打敗り、田町迄攻入候間、裏御門、大手御門、石火矢台、其他、処々へ散布、防戦仕候」(磐城平藩・鍋田治左衛門『銃士隊出兵進退取調書』)

F 六間門での戦い
「六間御門外、広小路には敵兵多勢押詰め、同所には彼相馬勢持場ににて、如何にも奮戦いたし、兵、悉く 勞 候に付、あら手を乞候間、外記、人数引連、同所へ相越、防戦いたし候内に、敵方より、大小の砲丸、高麗御門扉に烈敷中り、終に、門打折、扉明き候様相成候に付、土俵、土俵と口々に呼わり候得共、其場の至急、土俵の手当も間に合不申、不取敢、御威 初儀拾 五、六 俵持来り、右にて、門扉へ押当て、頻りに打合候」(磐城平藩『神谷外記書上げ』)

G 久保町での戦い
「七月十三日、神谷外記、久保町枳形御門へ隊長にて出張致し、(中略)彼は致し候内、大館権現山より、敵、北沢の方へ坂を下り来候間、枳形胸壁より、頻りに打合候得共、敢て、怪我無之、尤、小野崎右衛門、手の指少々怪我有之候のみ。其時、大雨大雷の折柄、弾薬 取 扱、殆ど難儀いたし、暫の内、打合候」(磐城平藩『神谷外記書上げ』)

本丸での出来事

「七月十三日、昼八ツ時頃、私、才樋御門外より御城内へ歸りの節、仙府兵隊、何方より逃げ来候哉、土橋の方より御城内迄引続、才樋御門、不明御門、参謀、古田山三郎、下参謀、佐藤直之助、氏江進初、御本丸へ逃げ込、右、三人の者、御隠居様へ御目通し、御立退被 遊 候様申上、退去いたし候」(磐城平藩『中村茂平書上げ』)

三ノ丸での出来事

「八ツ半時頃、只今、仙勢、夥敷く、御三ノ丸へ逃げ入候間、御制被下べくと申来候者此れある ばし、(中略)我々、御三ノ丸入口御門、此道幅式間程の処、押合候て逃げ入候間、御門、闕と申候得共、御門内、人、充満いたし、如何も致方無之、参謀、馬迄引入、内張御門、其外、堀を越へ、脱走いたし候」(磐城平藩『中村茂平書上げ』)

本丸での評決

「夜半に及び、退城御評決相成候旨、仰出され候に付、兵隊荒増相纏め、開城仕り候」(磐城平藩・鍋田治左衛門『銃士隊出兵進退取調書』)